

後藤宙外 編

新著月刊

復刻版

明治三十年四月
明治三十一年五月

解説 山本昌一 (国士館大学教授)

全十五冊・別冊一
揃定価 十二万円



自然主義文学の先駆け
明治三十年代文学研究に
必須の雑誌『新著月刊』の完全復刻版
不出版



第一卷第六号表紙



第一卷第八号表紙

【復刻のこぼし】

本誌は、小説を中心とする月刊の文芸雑誌である。編集は後藤宙外、ほかに島村抱月、伊原青々園、水谷不倒、小杉天外ら早稲田出身者が同人として関わった。寄稿はほかに広津柳浪、坪内逍遙

泉鏡花などで、自然主義文学の草創期の時代を体現している。また、島崎藤村・薄田泣菫らが新体詩を発表していることも見逃せない。一八九七(明治三十年)四月の創刊から数えて翌年五月終刊までの十五冊、明治二十年代紅露道鷗時代の継承と後進世代の小説台頭の機運形成に大いに寄与した雑誌として、貴重な資料である。



第二巻第二号口絵(富岡永洗画)

【主要執筆者】

饗庭篁村・泉鏡花・伊原青々園・小栗風葉・尾崎紅葉・河井醉石・小杉天外・後藤宙外・幸田露伴・島村抱月・薄田泣菫・坪内逍遙・広津柳浪・福地桜痴・水谷不倒・森鷗外・山岸荷葉

薄田泣菫

わずかに十五冊で廃刊になってしまつたが、この雑誌の、近代文学の上にも果した力貢まふべく、

【新著月刊関連年表】

- 一八八七年 『以良都女』創刊。(明治二〇年)
- 一八八八年 『都の花』創刊。
- 一八八九年 『新著百種』刊行開始。
- 一八八九年 『早稲田文学』(第一次)創刊。『早稲田文学』と『しがらみ草紙』を舞台に没理想論争始まる。
- 一八九三年 『文学界』創刊。
- 一八九四年 『清戦争始まる。文壇においても『戦争文学』花ざかりとなる。
- 一八九五年 『太陽』文芸倶楽部創刊。
- 一八九六年 『新小説』再刊。後藤宙外編集に加わる。小栗風葉『寝白粉』刊行。発禁となる。
- 一八九七年 『新著月刊』創刊。
- 一八九八年 『早稲田文学』(第一次)廃刊。
- 『新著月刊』廃刊。

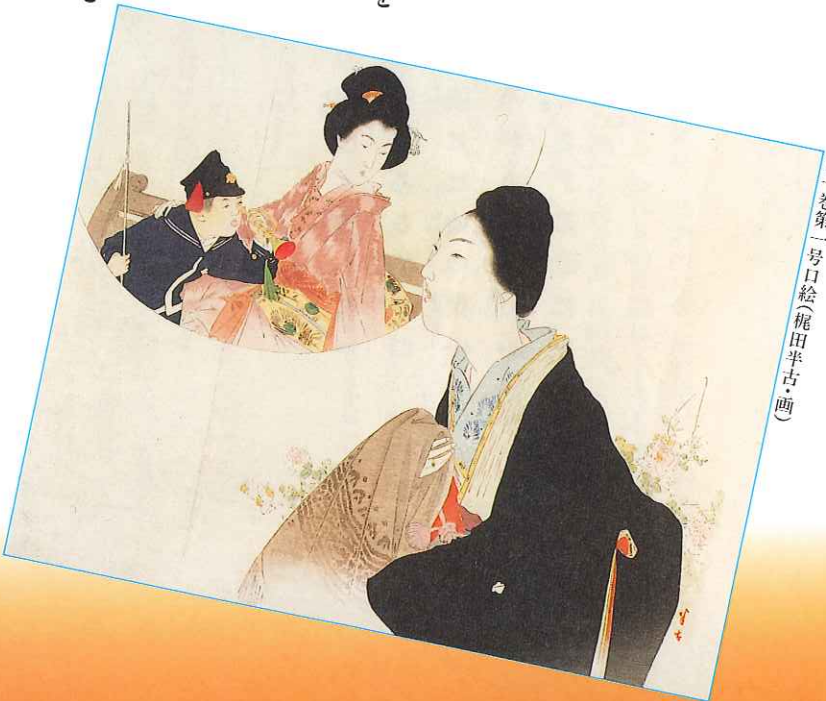


第一巻第五号口絵(寺崎広業画)

- この頃より、宙外・小杉天外・永井荷風等の活躍がはじまる。
- 一九〇〇年 『明星』創刊。いわゆるゾライズムの「写実主義」的作品の天外「初すがた」刊行。
- 一九〇一年 宙外『新小説』誌上に「思想惑乱の時代」発表。
- 一九〇三年 尾崎紅葉死去。硯友社文学の哀退。幸徳秋水、平民社を結成。
- 一九〇四年 日露戦争始まる。これをめぐり、主戦論・非戦論の論争たかまる。
- 田山花袋『自然主義宣言』といえる「露骨なる描写」発表。
- 一九〇五年 日露戦争後の文学として「自然主義文学台頭する。」
- 『新古今文林』創刊。
- 一九〇六年 島崎藤村『破戒』発表。
- 『早稲田文学』(第二次)復刊。島村抱月が加わる。
- 自然主義文学の思潮たかまる。
- 一九〇七年 花袋『蒲団』発表。
- 一九〇八年 自然主義文学の最盛期。
- 一九一〇年 (大逆事件)による言論弾圧。これにより、日本文学は、社会から家へ、体制から自己へと「私小説」的傾向を強めることとなる。
- 一九一一年 (大逆事件)の判決。



第一巻第七号挿画



第一巻第一号口絵(梶田半古画)



第一巻第六号挿画

明治三十年代の文壇研究に必須の資料―畑実

●不二出版は今までも雑誌の復刻や総目録などの仕事を沢山手がけてきたが、その一環として今度『新著月刊』を出すという。

●『新著月刊』は明治三十年に出て翌年終った比較的短命な小説雑誌ではあったが、島村抱月、小杉天外、後藤宙外など後の文壇で活躍した作家、評論家が同人として編集し、かれらの作品はもとより坪内逍遙、泉鏡花、広津柳浪、内田魯庵等の人々の諸作を載せたほか、「時文」欄に尾崎紅葉、森鷗外、二葉亭四迷などの諸家が、自己の作品の成立の由来を語った「作家苦心談」を連載して注目を集めた雑誌だ。

●それだけに明治三十年代のはじめの文学の動きを考える時に欠かすことのできない雑誌なのだが、現在は古書屋や古本屋の店頭で、揃いは勿論のこと、バラでも見ることはほとんどない。その上、これを所蔵している図書館も少なく、直接手に取って読むことは容易でない状態であった。今回復刻版が出ることによって今までと違って手軽に見ることができるようになるわけであるまい。ことごとくと思ふ。

この復刻が近代文学の研究に寄与することは決して小さくはない。(はたみのみる／帝京大学文学部教授)

日清戦後文学の貴重な証言―平岡敏夫

●日清戦争の記憶がまだ鮮明な明治三十年の春、菊判二百頁以上の月刊小説雑誌として創刊された『新著月刊』は、臨時増刊をふくめて十五回の刊行で翌年五月には廃刊という短い運命におわったが、創刊号の鏡花の名作「化鳥」や島村抱月の「時文」――「社会小説論」をはじめ、今日、明治文壇の貴重な資料として周知の『唾玉集』にまとめられる「作家苦心談」の連載など、明治文学史研究上、必見の雑誌である。

●しかし、今日、これを揃いで読むことはなほ困難であり、広く研究者の眼にふれるというわけにはいかなかった。今回の不二出版の復刻により、その全貌が姿をあらわすことになるのは、まことにありがたい。終刊号に「寵児埋葬の辞」を書いた編輯人のひとり後藤宙外の「小なりと雖も明治文学史上に不磨の足跡を印した」という思いもまた報われることになった。

●個人の思いからすれば、職人世界を取りあげ、兄思いの弟が出征したあとの妻の悲劇を描いた日清戦争哀話「広津柳浪「あにき」(第二号)、戊辰戦争で夫を失った妻とその子の悲劇という形で、日清戦争後の二軍人の述懐を描いた宙外の「誰が罪」(第四号)などにもうかがわれるように、創刊の前年に没した樋口二葉「たけくらべ」に「ごりえ」等もふくめた、もうひとつの戦後文学――日清戦後文学の貴重な証言としても、このたびの『新著月刊』の復刻を心から

よろこびたいのである。(ひらおかとしお／筑波大学教授)

文学と絵画との関係を知るための重要資料―三瓶達司

●わずか十五号で廃刊になってしまったが、この雑誌の、近代文学の上に果たした功績は少なくない。硯友社系と『早稲田文学』系の接触と離反という立場はもとより、その文芸誌としての企画の斬新さにしても、一頭地を抜くものがある。それらについては、他の先学が筆にされると思ふので、私は少し視点を変えて、挿画(当時は、いわゆる口絵も、作品と関係のない挿入画もこう呼んでいる)の面から、今回の復刻の意義を考えてみたい。

●明治二十九年、幸田露伴が編集に当たった再刊『新小説』も、純文芸誌にしては珍しく雅致ある装幀や浅井忠の口絵をもったものであったが、『新著月刊』の清涼な若竹の表紙には一籌を輸するものがあった。興味深いのは、梶田半古の登用で、その門からは小林古径・前田青邨ら、次代の新鮮な日本画の主流をなす人物が輩出し、やがては横山大観らと民間美術団体を結成する。つまり従来の浮世絵式画風から菊池容斎派の「前賢故実」の画風に一変しようとしたもので、これがやがて、パンの会から、「白樺」を経て、文人と画家との深い結びつきに連なってゆくのである。

●残念にも、出版者柴田資郎の商業第二主義のために、裸体画事件などを起こして、宙外の『回顧録』にもあるように「外観も内容も追々と劣悪なものになっていったが、文芸と挿画が新しくとりあげられている今日、この雑誌の復刻のもたらすものは大きいと思ふのである。(みかめ・たつじ／東京成徳短大教授)

世紀末に可能性を追求―清水 茂

●時の流れが、明治大正の雑誌類の保存状態をも、古ければ古いものほどわるくしています。おそろおそろ実物のページをめくると、背がバラけてしまったり、表紙が剥がれたり、ほとんど繙読に堪えません。揃ったものは、改めて装本し直されたりしたものが多く、実物の感覚・香気がつかみきれなくなってしまうです。

●実物が、実際の繙読や体系的研究に堪えない以上、複製にたよるほかはないのは必然で、このたびの不二出版による『新著月刊』の復刻版刊行は、まことに時宜を得た事業と言えるでしょう。

●『新著月刊』には、こんにちのいわゆる制度化した学歴依存の文化・研究態勢とは異なる、かつての早稲田、すなわち草創期の東京専門学校の得業生たちの結集による、創作に個性の可能性を追求しようとする「若さ」が感得されます。

いわゆる世紀末に於いて、新世紀へ向けての青春の活路をどうきりひらいていくのか。その方嚮を、九十年前、文芸に托した宙外「抱月」(丁酉文芸社)「丁酉は明治三十年」の若き文人たち。不知庵、天来、風葉、秋声、藤村、泣菫、鏡花ら未完の器たちがほとぼしらせられた諸作の初出。それら、文字どおりの可能性を、たとえば黒田清輝がフランスから持ち帰った裸体画写真の網版の表紙が、物議を呼んだ時代の雰囲気などとともにふりかえってみるのは興あることです。もちろん、逍遙、二葉亭、露伴、鷗外ら、当時の先輩作家の「苦心談」の連載を、分析的にたどりなおしてみるのも意義あることでしょう。(しみず・しげる／早稲田大学教授)



後藤宙外



坪内逍遙



島崎藤村



薄田泣菫



広津柳浪



小杉天外

新 薙 月 刊 第 二 號



小 杉 天 外

第 一 顔 の 穿 鑿

何がむづかしいと云つて、壹岐坂の咖啡屋の主人の顔ほど讀めない
解し難いものも無からう。額には母の乳房を見て笑つてゐる赤子の
頬のやうな、あどけない、縷々とした色があつて、眼には他の懐中
を狙つて居る攫徒のやうな、落着の無い、鋭いところがある、然か
と思ふと、唇はまた、口惜いことが有るけれど涙も零さず言葉にも
咖啡店

(一)

〔既刊圖書の二案内〕

山田美妙ほか・主宰明治20年〜明治24年刊

以良都女 いらつめ

◎全五巻・別冊一

『以良都女』は当初、女子教育を論じ、婦徳を高め、その地位の向上を期すると共に、言文一致の文体を世にひろめることを主としていたが、一四号から編集人となった山田美妙の活躍によつて小説・翻訳・新体詩・評論などすべてに美妙の独り舞台の感を呈した。また、婦人雑誌として『女学雑誌』とともに先駆的な役割を果たし、投書雑誌としてももの『文庫』と並称されるような役割を果たした。全八四号を取録。

〔復刻版〕

推薦||岡 保生・前田 愛・三好行雄・山田有策

別冊||解説(山田有策)・総目次・索引
A5判・B5判・上製・函入・総2、100頁
揃定価||六万円

山田美妙ほか・主宰明治21年〜明治26年刊

都の花

◎全三巻・別冊一

『都の花』は、文芸雑誌が色とりどりに開花した明治二〇年代の初頭小説を散文の主軸とする姿勢を明確にして創刊された最初の商業文芸誌である。同誌は、江戸の文人気質をたぶんに残した中根香亭、言文一致の新しいスタイルに意欲を燃やしていた山田美妙をスタッフに、大家・中堅・新進の諸作家を網羅、当時の文学状況を臨場感をもって伝えてくれる。全一〇九冊を取録。

〔復刻版〕

推薦||岡 保生・平岡敏夫・前田 愛・三好行雄・渡辺澄子

別冊||解説(山田有策)・総目次・索引
菊判・上製・函入・総13、438頁
揃定価||二七万円

水谷不倒ほか・主宰明治39年〜大正3年刊

趣味

◎全一九巻・別冊一

雑誌『趣味』は、自然主義文学運動の高揚期に、その中心的存在であった『早稲田文学』の姉妹誌、あるいは坪内逍遙の『文芸協会』の別働隊として、文学を中心に近代的な審美意識を向上させることを目的として発刊された。明治四〇年、水谷不倒から西本翠蔭の手に編集が移つてからは、文学雑誌としての性格を強め、多くの作家に執筆の舞台を提供、新たな文壇形成の気運を盛り上げた。総五九冊を取録。

〔復刻版〕

推薦||磯田光一・榎本隆司・大屋幸世・小田切秀雄

別冊||解説(尾形国治)・総目次・索引
菊判・B5判・上製・函入・総13、000頁
揃定価||三五万円

尾形国治・編者

『新小説』解説・総目次・索引

明治期の文芸雑誌『新小説』全三九九冊(第期・明治二年〜明治三年、第二期・明治二九年〜大正一五年)の総目次及び執筆者名索引を取録。

B5判・上製・452頁・定価||一万五千元

佐久間保明・編解説

『文章俱樂部』総目次・索引

大正文壇の縮図を示す文芸投書雑誌『文章俱樂部』全一五六冊・第一卷第一号〜第一四卷第四号(大正五年〜昭和四年)の総目次・執筆者名索引を取録。

B5判・上製・344頁・定価||一万八千元

第一卷第九号表紙

〔復刻版概要〕

新著月刊

一八九七(明治三十)年四月
一八九八(明治三十)年五月

全十五冊・別冊一

A5判・並製・総四二〇〇ページ

揃定価 十二万円

〔配本案内〕全二回配本

第一回配本

- 第一卷第一号
- 第一卷第二号
- 第一卷第三号
- 第一卷第四号
- 第一卷第五号
- 第一卷第六号
- 第一卷第七号

一九八八年十月
定価 五万円

第二回配本

- 第一卷第八号
- 第一卷第九号
- 第一卷第十号
- 第一卷第一号
- 第一卷第二号
- 第一卷第三号
- 第一卷第四号
- 第一卷第五号

一九八九年四月
定価 六万円

別冊(解説) 山本昌一・総目次・索引



不二出版

〒113 東京都文京区向丘一丁目二二
 TEL 〇三―八二―四四三三
 FAX 〇三―八二―四四六四
 振替 〔東京〕六一九四〇八四

1988/10